

マスク着用の有効性に関する科学的知見

2023年2月8日

西浦 博、阿南英明、今村顕史、太田圭洋、岡部信彦、小坂 健、押谷 仁、尾身 茂、賀来満夫、釜池 敏、河岡義裕、川名明彦、忽那賢志、小林慶一郎、齋藤智也、鈴木 基、館田一博、田中幹人、谷口清州、中島一敏、中山ひとみ、西田淳志、古瀬祐気、前田秀雄、脇田隆宇

1. はじめに

○マスクの着用は、会話や咳の際に自分の感染性粒子を飛ばさないようにすること（他者を感染させないこと）、そして、周囲の感染性粒子を吸い込むことがないこと（自分を感染させないこと）を目的としている。

○季節性インフルエンザでは有症状者が高い発熱と全身倦怠感を伴う症状のために、2次感染が起こり得る間は自宅以外で他人に接触することは限られていた。他方、新型コロナウイルス感染症においては、発病前の潜伏期間に2次感染の約半分に相当する感染が起こることが知られ[1]、また、発病せずに無症状のままにいる者や軽症の感染者から感染が広まりやすいことが知られている[2]。

○2020年6月以降、病原性が高いこと、そして、ワクチンの供給前や供給途中の状況で、感染によって免疫を得た人が少なかったことから、できる限り感染機会を減らすためにマスクを常に装着することが約2年にわたって推奨されてきた[3]。2022年5月24日に、政府は屋外のマスクの着用は不要であることを示した[4]。

○本文書では、日常生活での新型コロナウイルス感染予防におけるマスク着用の有効性に関する科学的知見をまとめると共に、諸外国におけるマスク着用の呼びかけについて事例を紹介する。

○本文書に記載された知見は、今後の研究の進展により更新される可能性がある。

2. 日常生活でのマスク着用の有効性に関する科学的知見

○いわゆる一般人口におけるマスク着用に関する78件の研究をメタ解析した結果では、マスク着用者の週あたり感染リスクが非着用者の0.84倍（95%信頼区間：0.71-0.99）に低下することが知られている。観察期間を2週にすると、着用者の感染リスクは非着用者の0.76倍（95%信頼区間：0.66-0.88）に低下すると推定されている[5]。これはマスクを着用することによって自分が感染しないための効果に相当する。ただし、人口中の着用率が低く感染リスクが比較的高い条件下（デンマーク）で実施されたランダム化比較試験では、着用者と非着用者の間で1か月間の感染リスクの差異は見出せず、自分が感染しないための効果が必ずしも十分でないとする知見もある[6]。



- 西浦氏や尾身氏がマスク着用が有効だとする資料を提出
- 参照されているメタ解析RCT論文は効果ありだが中身がおかしい
- 2022年の論文だが2016年までの論文の再解析でコロナ禍の知見含まず

図 3-10-1: 専門家が参照するRCTメタ解析論文は効果あり?